

論文要旨

学位論文題目「江戸後期日本漢文学研究

— 斎藤拙堂・頼山陽・頼春水・頼杏坪を中心に —」

直井文子

日本漢文学という分野は、日本人が隣国である中国の漢字文化を受容し、自国の文化として発展させてきたもので、日本文学と中国文学との間に位置するという二重性を持つ。各時代の中で江戸後期は、漢詩文作家も作品も最も充実した時期である。

本論は、そのような時代の知識層から斎藤拙堂、頼山陽、頼春水、頼杏坪の四名を選び、それぞれの作品に表わされた文学的思考を考察するものである。この四名を選択した理由は、まず彼らの漢詩文作品が文学的鑑賞に十分に堪え得るものであり、また彼らの社会的立場は当時の典型の一つと言えるが、その地位に至る過程等が、典型から少し外れた様相を呈しており、更にその連関が見られると思われるからである。

第一編では津藩藩儒となった斎藤拙堂の詩文について検討した。第一章では拙堂の代表作である『拙堂文話』を中心として彼の作品を分析し、中国中唐期の韓愈を端緒として秦漢の文へ遡れ、という拙堂の主張の、当時における意義を考察した。第二章では拙堂の紀行文と、中年から力を注いだという詩とを分析した。拙堂は紀行詩文では早くから、更に詩においては紀行以外でも自己の心情を思うままに表現し、従来の道徳的文

学観よりも新しい文学観を持っていたことを明らかにした。

第三章では『拙堂文話』の版本を検討し、その改作の課程と出版統制などとの関わりを明らかにした。

第四章では山田長政、浜田弥兵衛、鄭成功の伝記を著した『海外異伝』につき、その特徴と賛否両評、儒者としての拙堂の態度や本書の「小説」としての意義などを明らかにした。

第五章では、拙堂が漢詩文で「狂」字を使用した意図を分析し、彼は文では中国古代的な意味で「狂」を使用し、詩では唐代以降の意味に近い形で使用していることを明らかにした。

以上を踏まえ、第一編の結びでは、拙堂の意識の中での儒者と文人とについて論じた。

第二編では、藩儒の後継ぎの道を捨てて市井の儒者となった頼山陽の詩文について論じた。第一章では日本史上の女性を題にした「十二媛絶句」の成立過程と、十二名の選択理由、山陽の女性観、儒教の女性観との関わりを考察した。

第二章では、山陽が広島や京都で仲間と主催した詩社の在り方を検証し、山陽と文人たちとの交友の一面を明らかにした。

第三章では、山陽と拙堂の墓碑銘等の書き方を比較検討し、その相違と両者の生き方との関わりを論じた。

第四章では山陽の作品中の「狂」字を検討し、脱藩して「狂」と看做された山陽が生涯を通じ、「狂」字をネガティブな使い方からポジティブな使い方へと変化させたことを論証した。

以上を踏まえて第二編の結びでは、山陽の中の文人趣味的要素について論じた。

第三編では山陽の父・春水と叔父・杏坪の詩文を検討した。第一章では謹厳な儒者のイメージが強い春水の漢詩に、華やかに見える人生とは裏腹に、孤独の様相が強いことを考察した。

第二章では、兄と同じく広島藩儒となったが郡奉行に転じて実務に携わり、七十五歳でやっと致仕した頼杏坪の詩を検討した。彼には閑居が苦しみであり、自己を含めて老いゆく人人への応援歌としても詩作を行っていたことを考察した。

第三章では、杏坪晩年の漢詩と和歌とを併記した作品を検討した。彼は各作品を、その場に相応しい形式で創作したのみならず、本書においては漢詩と和歌とを巧みに組み合わせ、独特の世界を作り出したことを考察した。

これらを踏まえて第三編の結びでは、春水と杏坪の「狂」字使用法を検討し、拙堂や山陽と比べ、その文人意識を考察した。

以上の論考を通し、結語では更に他の知識人の例も踏まえ、斎藤拙堂、頼山陽、頼春水、頼杏坪の四名が、江戸後期という時代に伝統的な漢詩文という形式で、文学的水準の高い作品を創作したこと、儒者としての矜持を保ち、それぞれ程度は異なるが文人趣味にまで流れない文人的要素を持ち、現代の精神に通ずる、より自由な意識を持って自己表現を果たしていたことを論証した。

以上